

三津田信三『ついてくるもの』～主に怪談的視点から～

0. 初めに

三津田信三と言えば、ミステリの所謂「如きシリーズ」が有名であるが、それ以外にも怪談やホラーと呼べる様な作品を数多く発表している。今回は最近刊行された怪談短編集である『ついてくるもの』を題材にして、作家三津田の怪談観、またそれが三津田のミステリ世界に与えた影響等を考察して行きたいと考えている。立命館大学での三津田信三講演会に出席される向きは、今回の例会を一つのヒントとして作家三津田信三に関する自分の考えを深め、出来る限り他の作品も読み込み研究した上で講演会に臨んで欲しいと思っている。(それがおそらく、ミステリ研究会に入っている者の真摯な態度であろう)

1. 三津田信三プロフィール

編集者を経て、2001年に『ホラー作家の棲む家』で作家デビュー。(ただし1994年に鮎川哲也編のアンソロジー「本格推理 3 迷宮の殺人者」に「霧の館 迷宮草子 第一話」を応募して収録されている。) 編集者としての主な企画には、『ワールド・ミステリー・ツアー13』シリーズ、『日本怪奇幻想紀行』シリーズ、ホラージャパネスク叢書などがある。密室からの人間消失や、閉鎖空間での連続殺人(いわゆる「クローズド・サークル」)に代表される本格・新本格推理小説のテイストと、土俗的・民俗学的な怪奇譚の融合を図った作風をもつ。その作品は大きく二つに分けられ、作者と同名の作家三津田信三を登場人物としたシリーズと、流浪の幻想小説家刀城言耶(とうじょう げんや)を語り手としたシリーズがある。三津田信三シリーズではメタ構造をもった幻想怪奇小説であることが多いが、刀城言耶シリーズでは、最後のページを読むまでその作品が推理小説なのか怪奇譚なのかわからないという構造が特徴的である。また、中国や台湾、韓国などでも翻訳が出ている。

2. 『ついてくるもの』諸作品解説

これから、『ついてくるもの』全七作に関して、担当者の見解を交えつつ解説して行きたい。尚、各項目には必要と担当者が判断した場合に限り、クエスチョンを設けてある。自分が興味を持った作品のみでも構わないので、例会前にレジュメのクエスチョンを読み自分なりの解答を作成して頂ければ幸いである。

A: 「夢の家」～もう彼女は死んでるんでしょうか～

- ・登場人物: 僕(三津田信三自身)
- 協坂(物語の語り部)
- 畑守(協坂の上司)
- 白水加奈子(協坂が出会った女性)

・そもそも実話系怪談とは何か？

・この作品において大切になって来るキーワードは幾つかあるが、やはりその中でも大きな物は夢であろう。脇坂は白水加奈子という女性と知り合い、その女性とのトラブルの中で加奈子が家に自分を誘うという夢を見る。しかもその夢は毎晩続き、日に日に脇坂はその家の中へと抗うことも出来ずに入って行かざるを得ないのである。ここで、三津田信三が夢を説明する概念として導入しているのが記紀神話でお馴染みの黄泉の国である。現代的な時代設定・時代背景の中にさり気なく記紀神話の成分を混ぜていく手法は見事という他はない。

B：「ついてくるもの」～お姫様だ。なぜか彼女は無事だった～

・登場人物：私（高校生）

祖母

父

母

光輝（私の弟）

・憑き物というテーマは、数多くの作家たちが描いて来た物である。しかし、その正体は作者も認めている通りあまりにも多種多様であり、現時点においてそれら全てを把握することは最早不可能となっている。この「姿はあるが正体は無い」という現象が付随してくる憑き物という概念を如何に物語世界で再現して行くのかはある意味で作家の苦心する部分であろう。高校生の私が、とある一家が夜逃げしたと噂されている家から持ち出した、たった一つ無傷だった雛人形のお姫様。しかし、そのお姫様を手にしたが為に彼女の一家はペットの死から始まり、次々と悲惨な運命を辿って行く……。現代社会においてその一瞬の隙をついて現れる得体の知れない憑き物の恐怖を存分に味わえる名品である。

Q：果たして、「私」が遭遇し見ていた雛人形達（片目・片足・片手が欠損した雛人形の無傷の雛人形であるお姫様）は本当に実在していたのだろうか？例えば、52頁5行目「お内裏様をはじめ十四体の人形は、全て消えていた……」や56頁で父の言として記される「私」が何かを握り締めていたり拾い出しているという描写は考えるヒントになるだろう。

C：「ルームシェアの怪」～あの家に残る最後の一人にはなりたくない～

登場人物：亀有真由美（物語の語り部）
浦安景子（真由美の会社の先輩）
沢渡（四つ葉荘のメンバー）
徳永（四つ葉荘のメンバー）
野々村（四つ葉荘のメンバー）

・自分の家に見知らぬ存在がいるというのは、どうやら人間にとっては堪らなく忌避すべき事であるようだ。だからこそ、明治時代から今日にかけて、所謂「家の中に潜むアウトサイダー」とでも呼ぶべき怪談群が古今東西を分かつずに語られているのだろう。今回の「ルームシェアの怪」はその応用バージョンとでも呼ぶべき物である。何故なら、赤の他人とルームシェアを行っているという時点で自分を守護する筈の家にアウトサイダーが既に潜んでいるのだから。しかし、このアウトサイダーの他に更に異質なアウトサイダーがいた場合はどうだろうか。この様な二重のアウトサイダーに囲まれているという状態で起こる怪異は、野々村というルームシェア仲間が最近姿を見せないというちょっとした異変から始まる。真っ白のキャンバスに付いた小さな黒色の点の様な疑惑は、やがて四つ葉荘のメンバーを徐々に蝕んで行く事になるのだが……。

D：「祝儀絵」～あの女はぺらぺら……～

登場人物：竹本勝秀（物語の語り部）
知代（竹本の恋人）
広美（竹本の叔母）
曾祖母

・絵という物は、時として魂を宿らせる事がある。これは何も人の魂だけではない。人間の思いが、新たな魂を絵に与え、その絵が怪異をなすという事もある。付喪神絵巻を紐解くまでもなく、日本には様々な付喪神が存在している事は周知の事実であろう。憑き物と同じレベルで、付喪神は全国に散らばり、様々な形態で伝えられ、創作されている。しかし、それは同時に付喪神という物がキャラクターとして独自の地位を築いてきたという事をも意味している。ある意味で、怪談作家にとって付喪神は憑き物よりも厄介な題材なのかも知れない。竹本勝秀が叔母の広美から貰ったのは婚礼の儀を描いた祝儀絵だった。しかし、勝秀はその絵に何とも言えない歪さと気味の悪さを感じてしまいます。やがて、彼の会社の同僚や恋人である知代の前に勝秀の許嫁と主張する女性が現れて……。

・妖怪と怪談の関係性について（妖怪因数適用論）

Q：物語の最終部。1 1 1 頁後ろから 2 行目から 1 1 2 頁 3 行目までのメモが何を意味するのか。

E：『**八幡藪知らず**』～お前だけで精一杯やった……～

登場人物：恵太（物語の主人公）

優介（恵太の友人）

健一（恵太の友人）

靖彦（恵太の友人）

相太郎（恵太の友人）

叔母

祖母

・この世には、入ってはいけないと言われている場所がある。それは場所によって様々であるが、やはり一番禁忌として入る事を禁じられているのは森である場合が多い。八幡藪知らずもその様な所謂禁忌的な場所であり、それは同時に異界への入り口でもあるという事を意味する。物語の主人公である恵太は友人達に近くの無女山に行きたいと言われる。しかし、友人達の中の慎重派の意見によって無女山に関する伝承を調べて行くと不気味な証言が次々と得られるのだが……。八幡藪知らずに限らず様々な伝承・民俗をミックスする事で立ち現われる幻影は読む者をまでも異界の森へと誘わずにはいないだろう。中篇怪談の良作。

F：『**裏の家の子供**』～裏の家に子供がいるみたいなんだけど……～

登場人物：私（物語の語り手）

彼（私の恋人）

岸辺（不動産業者）

小澤夫妻（裏の家の住人）

怪談には細かく分類すると、不条理怪談と言われる作品がある。最近の作家で言えば朱雀門出がSSでこの手の作品を得意としているし、稲川淳二も時として発表している。この手の話の特徴の一つは、何が起きているのか語っている話者でさえも全く理解出来ていないという点であろう。「何処をどう解釈すれば良いのか判らないが、しかし確実に何かが起きている。しかし、詳細に説明する事は出来ない」という話と云えばいいだろうか。この時、語り手は一切の解釈を排除して語る。いわば、時系列を述べるロボットの様になっている。なぜなら語り手自身にもそれが果たして何を意味していたのか全く理解出来ていないのだから。新しい家に彼と共に引っ越した私は、裏の家の子供の声に煩わされる事となる。近所の人の集まりで聞き込みをするが全く詳細は判らない。そうこうしている内に、家の中に白アリが大量に発生し、夜中に何者かが家の中を歩く気配がして……。

G：『椅人の如き座るもの』～先生の場合は、人情いうより根性です～

登場人物：祖父江偲（編集者）

刀城言耶（作家・探偵）

阿武隈川鳥（刀城言耶の先輩）

鎖谷鋼三郎（人間家具職人）

折田健吾（鋼三郎の弟子）

鎖谷照三（鎖谷木材専務）

元村（照三の部下）

これまで6編の怪談の世界を潜り抜けて来た我々に、突如としてミステリという異界からの招待状が届く事となる。我らが探偵、刀城言耶の登場である。人間家具職人である鎖谷鋼三郎に敵意を抱く鎖谷木材の鎖谷照三の消失を目の当たりにした怪想社編集者の祖父江偲は、自分が担当している作家である刀城言耶にこの人体消失の謎を解かせようと目論むが言耶はそれを断って……。江戸川乱歩の『人間椅子』が背後に見え隠れしており、その関係性を考えるのもなかなか楽しい一篇。

・ミステリとしての構成に関して

3. 三津田の怪談観に関して

各篇の解説が終わった所で、これまで見て来た三津田の大まかな怪談観の抽出という物を試みたい

- ・ 怪異の実態の有無

- ・ 人間と怪異の関係性

4. 三津田信三の怪談及びミステリにおける怪異の射程の違い

この項では三津田信三の手がける怪談とミステリに関して、その発現する怪異の性質の違いに着目して二つの観点から考えてみたいと思う。

- ・ 三津田信三の怪談における怪異とミステリにおける怪異の空間的相違

- ・ 怪談とミステリ、その中における怪異の発現のメカニズムとその効果

5. 末尾に代えて

これまで三津田信三の作品に関して考察を加えて来たが、勿論の事、今回は担当者自身がミステリに関しては初心者であり、専門領域が怪談である事から、最後の作品意外に関しては、全て怪談の側からの指摘を中心に論を展開した。とはいえ、三津田作品がミステリというたった一つのレンズのみでは測りきれない事は周知の事実であり、多角的な視点から考察をして行かなければその全容は全くとらえ切れない事も事実であろう。今回の担当者の稚拙な議論をヒントに、三津田だけでなくより多くの作家に関してジャンルを超えた考察がなされる事を期待し、また三津田信三講演会に参加される向きのささやかな考察のヒントになれば幸いである。以上で、末尾の言葉としたい。